

や、アメリカ医学史協会のオスラー記念メダルなどの裏面にも、アスクレピオスの杖が刻まれている。

歴史的古事にもとづいて定められ、全世界で採用されている医学のシンボルに対する理解が次第に普及されているが、誤った医学のマークが、いまだに新しく生まれ出ることが稀でない事実は、甚だ遺憾に堪えない。図案家たちの認識不足によることもあると思われるが、医学関係者も等閑に付すことなく、これに関心を持ってもらいたいものである。

(篠原病院)

医学史の歴史

中川米造

人間または、その集団である社会の理解にとって歴史的方法は不可欠である。この場合歴史は肯定的であるか、批判的であるかの別はあるが、いずれにしても現実の再確認を目標にしている。もしそれを欠くときは、現実は基点を失って漂泊する。

医学史は、これまで、いろいろの立場で編まれてきているが、医学史家が、自らの立場を明らかにすることは稀である。しかし、編まれたものから、逆にその立場を推測することは可能である。もちろん、そのような推測自体が一つの立場であることも確かであろう。

いま医学は一方で空前の繁栄をとげながら他方、急速に翳が拡がりつつある。これがどのように推移するかは、実は、いかに推移させるかという主体的な意志にかかわるものであり、その意志を確かめるための足掛りとして歴史的

接近をしようとするとき、医学史そのものの歴史を批判的に再検討することは、きわめて重要であり、医学史の効用をさらに積極的にする所以であろう。

このような前提にたつて、医学史の歴史を顧るとき、大別して、三つの段階を経ていると思われる。医学人物史、狭義の医学史、そして医学の社会史である。ルネサンスころに始まる医学人物史の方法では、当然、現代医学の問題点とはとらえがたいであろう。一九世紀に起始をもつ、発達史観に立つ、狭義の医学史では、その發展的継承の意志を再確認するためには有効であつても、その批判的再検討の基礎とはなりがたい。やはり医学とそれへの社会的要請と応答のなかでなければ問題は明らかにしえないであろう。

今回は、古い医学史書の中に、いわゆる近代医学の指標とされている、いくつかの事項がどのように扱われているかについて述べることにしたい。

(大阪大学医学部衛生学教室)

医学教育における

医史学資料の評価

寺 畑 喜 朔

本学では第一学年の第一、二両学期にわたり、週一回計二十回の医学序説が必須教科として課せられている。前期は明治中期以前の日本医学史を中心に「医」とは何かを講述し、後期は明治中期から現代医学への発達を各分野に分けて、その概説を教育している。

この課程の中間の夏期休暇には、一つのテーマを提供し、学生各自に調査研究することを課している。過去のテーマはつぎのようである。頭標題は「わが郷土における……」で種痘の始まり、病院の始まり、明治期の医療、ドイツ医学の導入者などで、以上の中から医史学的調査研究が医学教育に如何に成果を得たかについて例示する。

一、江戸における種痘に関する史跡(中村秀一)、中村は自宅(文京区向丘)の近所に長い間開業している木下秀一郎